京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2017-14

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一七－一四　長岡京跡・淀城跡

長岡京跡・淀城跡

2018年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡・淀城跡

2018年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物建替に伴う長岡京跡・淀城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

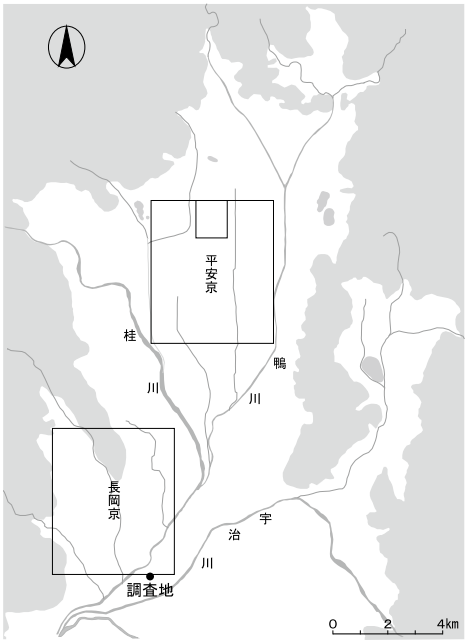
平成30年７月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	長岡京跡・淀城跡　（京都市番号　17NG294） 長岡京左京第599次調査
2	調査所在地	京都市伏見区淀本町225番地
3	委　託　者	ケイコン株式会社　代表取締役社長　荒川　崇
4	調 査 期 間	2018年２月５日～2018年３月16日
5	調 査 面 積	300㎡
6	調査担当者	松永修平
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「神足」・「納所」・「円明寺」・「淀」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	松永修平
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査の経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）遺跡の位置と歴史的環境 …… 3
（２）周辺の調査 …… 4
３．遺　　構 …… 8
（１）基本層序 …… 8
（２）遺構 …… 8
（３）石垣の石材 …… 13
４．遺　　物 …… 15
（１）遺物の概要 …… 15
（２）土器類 …… 15
（３）瓦類 …… 18
（４）土製品 …… 21
（５）石製品 …… 21
（６）金属製品 …… 21
５．ま と め …… 24

図　版　目　次

図版１　遺構　１　調査区全景（北西から）
２　石垣１（南東から）
図版２　遺構　１　調査区南半部（北東から）
２　石垣１裏込め（北西から）
３　石列２（北東から）
図版３　遺物　出土土器
図版４　遺物　出土瓦

挿　図　目　次

図１　調査地位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査前全景（西から）　……　2
図３　作業風景（北から）　……　2
図４　調査区配置図（１：600）　……　2
図５　周辺調査位置図（１：5,000）　……　4
図６　調査区平面図（１：120）　……　9
図７　調査区南壁断面図（１：80）　……　10
図８　石垣１実測図（１：80）　……　11
図９　石垣１裏込め断面図（１：40）　……　12
図10　石列２実測図（１：40）　……　12
図11　割石１（西から）　……　13
図12　割石２（東から）　……　13
図13　割石３：下、割石４：上（南から）　……　13
図14　割石矢穴痕拓影（１：８）　……　14
図15　出土土器実測図１（１：４）　……　16
図16　出土土器実測図２（１：４）　……　17
図17　軒丸瓦拓影及び実測図（１：４）　……　19
図18　軒平瓦・菊丸瓦・その他の瓦拓影及び実測図（１：４）　……　20
図19　土製品実測図（１：４）　……　21
図20　石製品実測図（石仏１：６、五輪塔１：４）　……　22
図21　銭貨拓影（１：１）、金属製品実測図（１：４）　……　23
図22　懐中鏡実測図・写真（１：１）　……　23

表　目　次

表１　周辺調査一覧表　……　5
表２　遺構概要表　……　8
表３　遺物概要表　……　15
表４　土器一覧表　……　26
表５　瓦一覧表　……　27

長岡京跡・淀城跡

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

本調査は、ケイコン株式会社本社建替計画に伴う発掘調査である。工事計画に基づき、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という。）が本調査地の試掘調査を行い、淀城二ノ丸の東面を画する堀の一部を検出した。その結果、文化財保護課は発掘調査を指導し、発掘調査はケイコン株式会社から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

（２）調査の経過

調査区は、文化財保護課の指導に従い、ケイコン株式会社敷地内東南隅に設定した。東西15ｍ、南北20ｍの300㎡である。

調査は2018年２月５日から開始し、重機により表土掘削した後は、人力で遺構の検出、掘り下

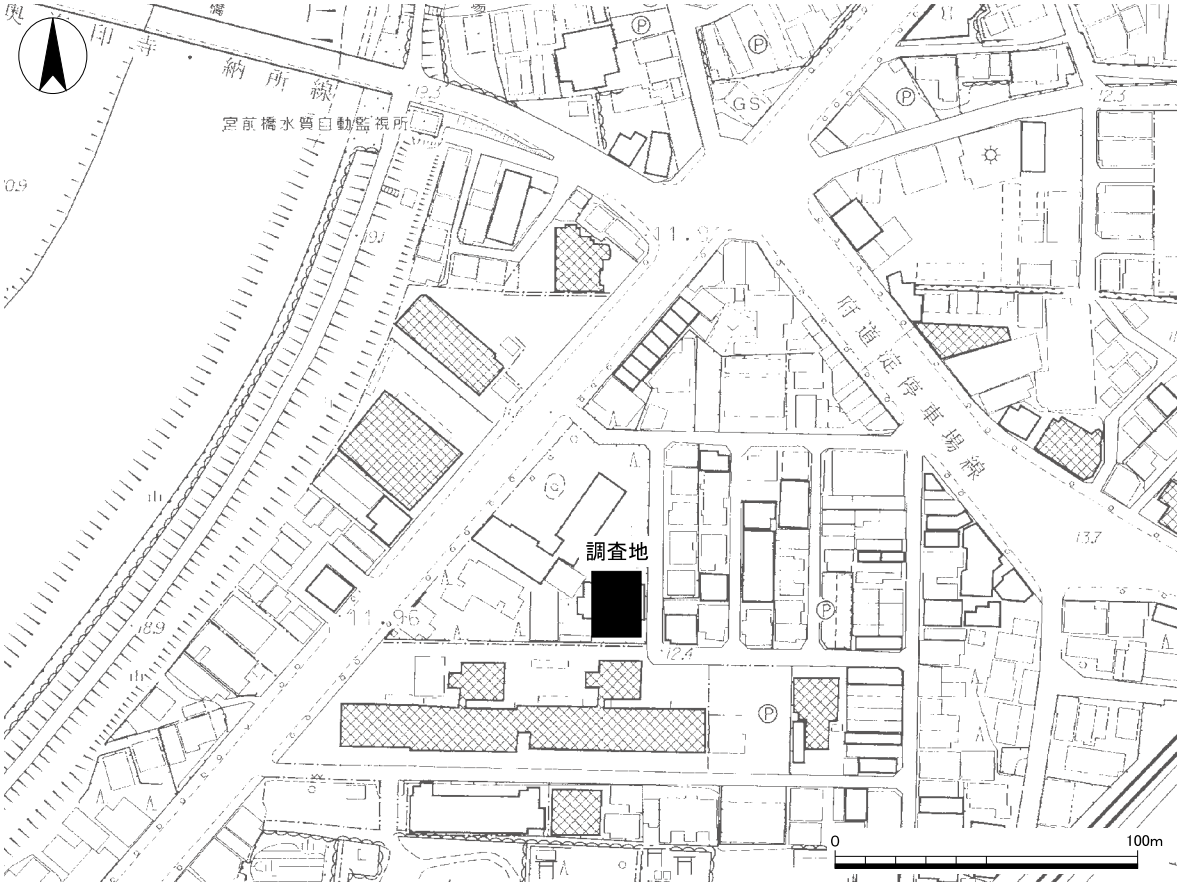


図１　調査地位置図（１：2,500）

図２　調査前全景（西から）

図３　作業風景（北から）

げを行った。調査の結果、調査区東端で二ノ丸の東面する石垣及び内堀を検出した。また、石垣西側で、二の丸造営時の造成土の断割調査を行った結果、調査区南西部で南北方向の造成単位とそれに伴う石列を検出した。

遺構の記録は、随時平面図及び断面図を作成し、写真撮影を行った。石垣、石列についてはオルソ測量により図化した。埋め戻しは３月15・16日で行い、石垣及び裏込めは保護するために砂を用いて養生をした。

調査中は適宜、文化財保護課の検証を受けた。

また、調査中は北垣聰一郎氏、高田徹氏、橋本清一氏、森岡秀人氏に現地でご指導・ご教示いただいた。記して感謝を示したい。

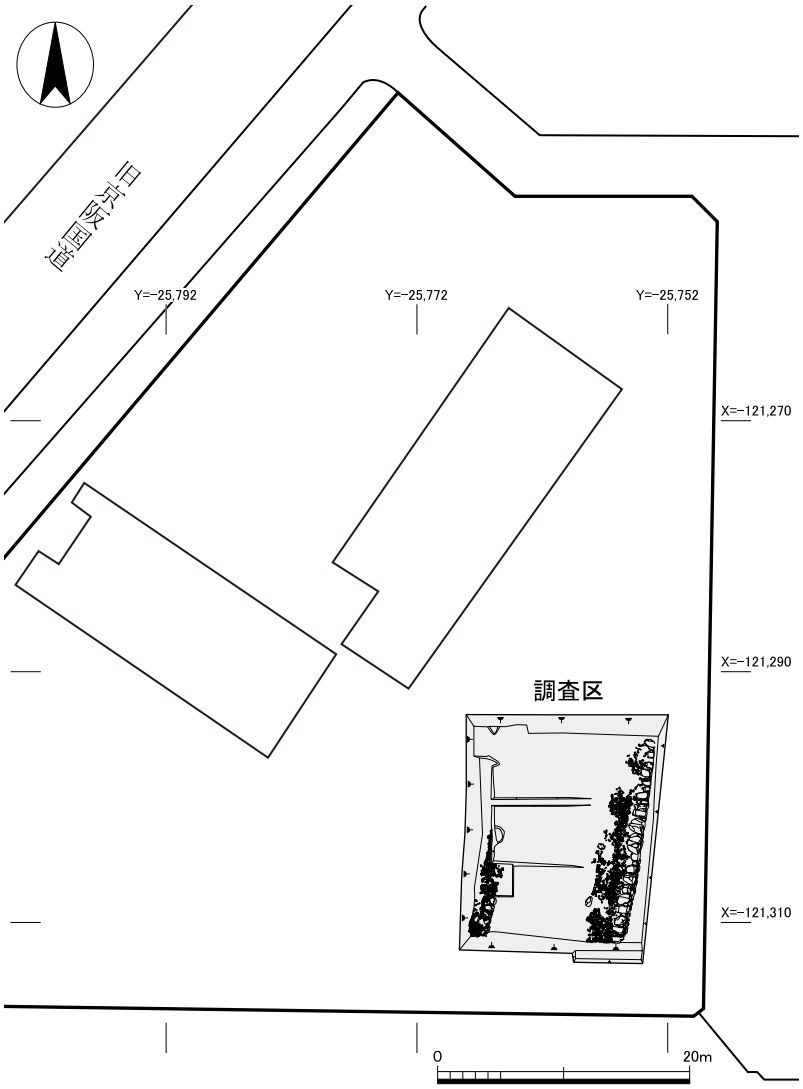


図４　調査区配置図（１：600）

２．位置と環境

（１）遺跡の位置と歴史的環境

本調査地周辺は、長岡京跡及び淀城跡にあたる。長岡京の旧条坊案では左京九条三坊十一町跡にあたっており、長岡京左京第599次調査となるが、現在では長岡京の条坊案の見直しによって京外となっている。

淀の地は宇治川・桂川・木津川の三川が合流する地点である。河川陸上交通の要衝の地にあり、平安時代には「淀津」が存在し栄えていた。淀の名前が文献史料にはじめて登場するのは、延暦23年（804）桓武天皇の与等（淀）津に行幸の記事である。(『日本後紀』延暦23年７月24日条)。また、大同５年（810）の平城太子天皇の変（藤原薬子の変）に際しては、与渡市津に頓兵が置かれ(『日本紀略』大同５年９月11日条)、有事の際には都を守護する前線の役割も果たした。

中世には中島に「魚市」が存在し、淀津は都に運び込まれる海産物や塩の集散地であった。戦国時代には淀城が存在していたが、これは淀古城と呼ばれているもので、現在の淀城跡より約500ｍ北の納所に位置したと考えられている。淀古城は天正17年（1587）に淀殿の産所として豊臣秀吉によって修復されるが、伏見城の築城計画とともに廃城となった。現在石垣と堀が残る淀城は、伏見城の廃城に伴い、淀の立地的重要性から京都護衛の城として徳川２代将軍秀忠の命により松平定綱が元和９年（1623）から寛永２年（1625）にかけて築城したものである。

松平氏以降、淀城は江戸時代を通じ譜代大名の居城となる。寛永10年（1633）には、永井尚政が入城し新たな城主となった。永井藩政期には木津川の流路の移動による城下町の拡大が行われた。寛文９年（1669）には石川憲之が、正徳元年（1711）には戸田光熙が、享保２年（1717）には松平乗邑が相次いで城主となった。享保８年（1723）に稲葉政知が城主となった後は幕末まで稲葉家が淀藩の藩主となった。

淀は江戸時代を通じて、城下町・宿場・港町として栄えたが、淀城は宝暦６年（1756）の落雷によって天守など城内の多くの建物が焼失した。この後、天守は再建されることはなかった。また、慶応４年（1868）の鳥羽伏見の戦いの際には、幕府軍の本陣となるが、敗走時にその入城を拒んだため、城下町に火を放たれ被害を受けた。明治維新後は廃藩置県により淀藩は廃藩となり、淀城も廃城となった。その後、河川の付け替え工事や明治７年の淀裁判所建設計画に伴い淀城の石垣の解体工事が行われ、天守本丸の石垣を残し大半の石材は取り払われた。現在では、淀城跡公園として本丸と天守台の石垣及び内堀が残されているのみである。

参考文献

星野猷二・三木善則『器瓦録想　其の三　淀城』伏見城研究会　2007年

西川幸治編『淀の歴史と文化』　淀観光協会　1996年

（２）周辺の調査（図５、表１）

淀城跡では、1976年から現在まで多数調査が行われ、江戸時代前期以降の淀城期と築城以前の安土桃山時代末期から江戸時代初期に相当する遺構が検出されている。遺物は平安時代・中世のものも出土しているが、遺構としては安土桃山時代より古い時代のものは確認されていない。

淀城築城以前　2004・2006年・2011年に行われた調査で、路面（大坂街道）、石列、町家の柱穴、建物の礎石列を検出している（調査16・20・23）。路面は何度も補修・改修がなされている様子が確認された。淀城が築城される以前は町家が立ち並び栄えていたことが窺える。

淀城期　淀城に関連する調査は、1976年の試掘調査で二ノ丸西側の内堀東辺の石垣を検出したことから始まる（調査１）。その翌年からは、天守台の４面石垣の測量調査がなされ、立面図が作成された（調査２）。1977・78年の調査では、天守台の発掘調査も行われ地下施設の存在が確認された。これを受け、1987年に天守台の全面調査が行われ石蔵の存在が判明し、さらに宝暦６年の落雷により全面が著しく焼けていることが明らかとなった（調査６）。石垣の改修工事は1989年８月から翌90年３月まで実施された（調査７）。

東曲輪の発掘調査では、北端部で絵図や文献資料にみられる米蔵の基礎を検出したことで東曲輪全体の復元が可能となった（調査12・13・16）。この米蔵を囲う石垣や溝、前面に広がる路面状の整地を検出し（調査21・22）、2010年の調査でも中堀に面する堀と石垣、門（京口門）礎石を検

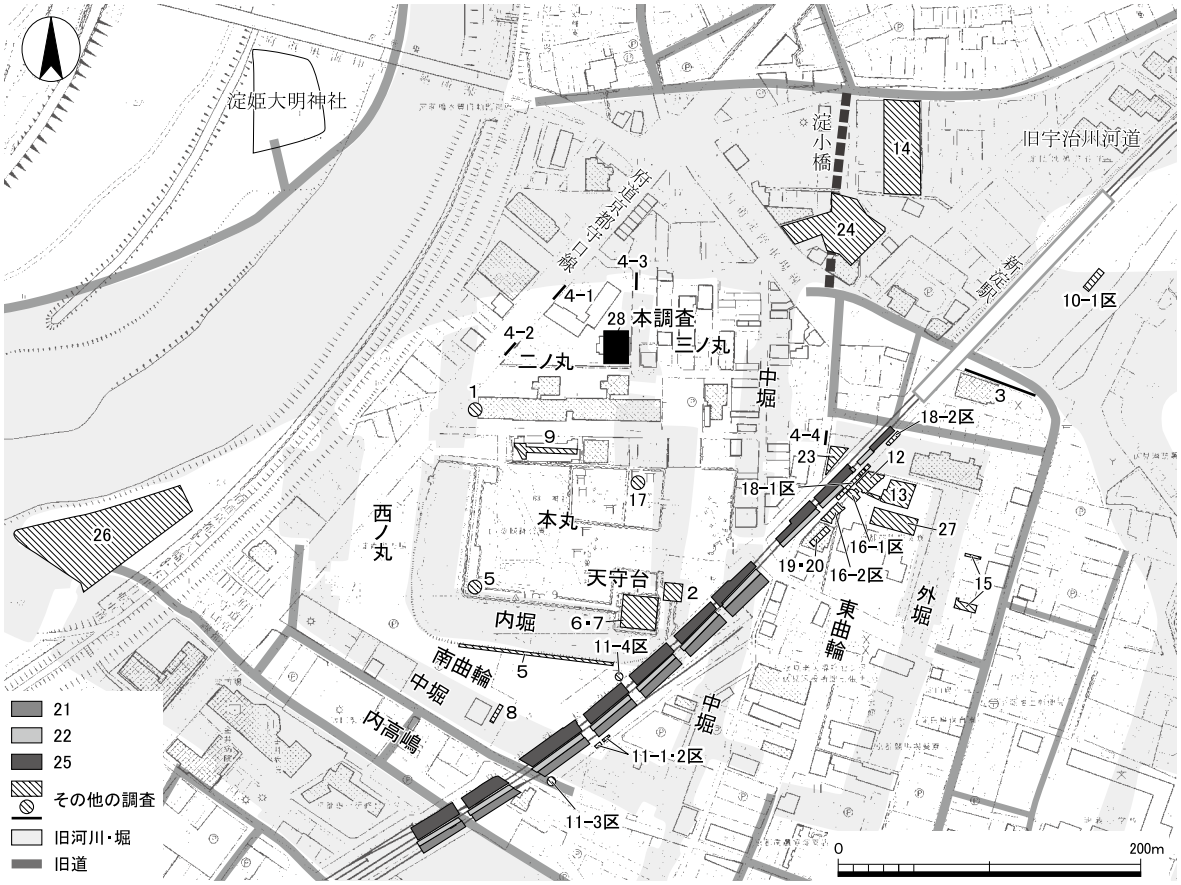


図５　周辺調査位置図（１：5,000）

表１　周辺調査一覧表

調査番号	調査地点	調査種類	調査機関	所在地	調査期間	面積	主な成果	文献番号
1	二ノ丸西側内堀	試掘		淀本町	1976.12		二ノ丸西側の内堀東辺の石垣を検出。	6 表23-1
2	本丸天守台、内堀東辺石垣	立会・試掘、石垣調査	淀城跡調査団	淀城跡公園	1977.8～9、1978.3～5		天守台４面石垣立面図作成。天守台南西隅を試掘、石蔵の存在を確認。北東隅を試掘、犬走りの状況を確認。	１・２
3	城下北端部	立会		淀池上町地内	1984.6～		北面する石垣を検出、旧宇治川の護岸か石垣か。	6 表23-7
4	二ノ丸北端部、中堀東側	立会		淀本町ほか	1984.8～		１・３地点で人頭大の集石を検出、旧宇治川の護岸石垣か。４地点で東西の石垣を検出。	6 表23-8
5	本丸屋敷南西隅櫓台、内堀南岸	立会・試掘	淀城跡調査団	淀城跡公園	1986.8～10		石垣改修工事に伴っての立会調査。 内堀南岸の石垣を確認。	１・２
6	本丸天守台、天守台西・南石垣	発掘、石垣石材調査	淀城跡調査団	淀城跡公園	1987.7.30～12.25		天守台：石蔵(地下室)の存在が明らかになり、柱礎石などを検出。宝暦６年の落雷により全面が著しく焼けている。石垣調査：全面の石材計測・図かと刻印・墨書の有無の確認。	１～４
7	本丸天守台	石垣改修工事	緑地部	淀城跡公園	1989.8～1990.3		天守台の四周石垣の積替え改修工事が実施された。	5
8	中堀	試掘	埋文研	淀本町174-62、148-1	1990.10.1	36.4㎡	中堀北肩部の石垣を確認。	6
9	本丸・二ノ丸境界	試掘	埋文研	淀本町173-10	1996.2.7～2.9	129㎡	本丸と二ノ丸の境界となる「Ｌ」字状に屈曲する北列石垣と東列石垣を検出。	7
10	城外北東部	試掘	埋文研	納所町 (京都競馬場北西外周道路)	1999.8.16～1999.9.3	115㎡	ＧＬ-２ｍまで現代盛土、１区では明確な遺構遺物は確認できなかった。	8
11	南曲輪、内堀、中堀	試掘	市埋セ	淀池上町 (京阪電鉄構内)	2003.2.17、11.10、11.13	22㎡	１区：土坑、２区：南曲輪相当部で東西方向の石垣、３区：中堀南岸の石垣、４区：内堀南岸の石垣裏込め。	9
12	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2003.11.7～2004.1.19	200㎡	［淀城期］布掘基礎の東西に長い土蔵跡を検出。	10
13	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町	2003.11.13～2004.1.21	280㎡	［淀城期］布掘基礎の東西に長い土蔵跡を検出。絵図に見られる「米蔵」に相当。	11
14	旧宇治川河道	試掘	市埋セ	納所町560-1ほか	2003.12.25	33㎡	旧宇治川河川敷に該当。	12
15	東曲輪外堀	試掘	市埋セ	淀池上町38ほか	2004.10.14	14㎡	２箇所の調査区。［淀城期］現状から約５ｍ東側で、南北石垣を確認、本来の石垣外周ラインが判明。外堀に接続する堀の存在を確認。	13
16	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2004.11.30～2005.3.2	130㎡	２箇所の調査区。［淀城以前］町屋関連建物・カマド・井戸。［淀城期］布掘基礎の土蔵の南西隅部、路面、南北溝、石組、柱穴などを検出。	10
17	本丸北東部	試掘	保護課	淀本町167 (輿杼神社境内)	2006.4.26	3㎡	境内北辺・東辺の石垣が淀城当時のものであることを確認。設計変更を指導。	14
18	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2006.5.8～2006.6.13	116㎡	２箇所の調査区。［淀城以前］東西方向の石垣を検出。［淀城期］東曲輪の区画に関する石垣、石列、井戸などを検出。	15
19	東曲輪	試掘	保護課	淀木津町～納所下野 (京阪電鉄構内)	2006.5.9	28㎡	［淀城期］焼土層・溝・整地層などを確認。発掘調査を指導。	14
20	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2006.6.14～7.11	64㎡	［淀城以前］大坂街道の路面。江戸時代初頭の石列、瓦列、路面、柱穴などを検出。	16
21	内高嶋、中堀、南曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内 (京阪電鉄構内)	2006.8.21～2007.2.28	1,350㎡	Ａ１～２・Ｂ１～５の７箇所の調査区。石垣、柱列、建物、土坑、布基礎、集石、石列、礎石、瓦溜、雨落ちなどを検出。	17
22	内高嶋、中堀、南曲輪、東曲輪、外堀	発掘	埋文研	淀池上町地内 (京阪電鉄構内)	2010.2.15～8.31	980㎡	Ａ１～２・Ｂ１～５・Ｃ１～３区・Ｃｓ２区の11箇所の調査区。［淀城以前］土坑、柱穴、礎石、路面、溝、地業、石列、縁石、小径、空閑地、落込みなどを検出。［淀城期］土坑、柱穴、礎石、石列、石垣、堀、集石、路面、溝、土手、堀込、杭列などを検出。	18
23	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2011.2.22～3.31	115㎡	［淀城以前］大阪街道と考えられる南北道路路面、敷地境界石列などを確認。［淀城期］東曲輪における門・角櫓・石垣・堀などを検出。	19

調査番号	調査地点	調査種類	調査機関	所在地	調査期間	面積	主な成果	文献番号
24	旧宇治川河道	試掘	保護課	淀本町215-2ほか	2011.4.6	28.3㎡	ＧＬ-1.2ｍで河川堆積を確認。	20
25	内高嶋、中堀、南曲輪、東曲輪、外堀	発掘	埋文研	淀木津町・下津町地内（京阪電鉄構内）	2011.9.20～12.7	1,727㎡	Ａ１～２・Ｂ１～５・Ｃ１～３区の10箇所の調査区。［淀城以前］路面、地業、土坑、礎石建物、柱列、柱穴、柱基礎、溝を検出。［淀城期］土坑、礎石列、集石、石垣、石列、階段状石列、布掘基礎、井戸、溝などを検出。	21
26	内高嶋	範囲確認調査	保護課	淀木津町地内ほか	2015.8.24～9.24	2,470㎡	［淀城期］池跡、瓦組遺構、石組枡、木樋・木製桝、石垣、集石遺構を検出。	22
27	東曲輪	発掘	埋文研	淀池上町地内	2017.3.21～5.19	330㎡	［淀城期］土坑、ピットを検出。築城時の整地方法を確認。	23
28	二ノ丸跡	発掘	埋文研	淀本町225	2018.2.5～3.16	300㎡	［淀城期］二ノ丸の東面する石垣を検出。	本報告

※ 調査機関については、以下のように略記した。
緑地部：京都市建設局 公園緑地部。埋文研：財団法人・公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所。市埋セ：京都市埋蔵文化財調査センター。
保護課：京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課。
※ 調査番号は図５と対応。

出した（調査23）。また、この東曲輪が1.5ｍ以上の盛土によって整地されていることも調査により明らかとなっている。整地に際しては東曲輪の外周部分を硬く締まるシルト質の土砂で堤状の盛土を築き、その間に砂礫を充填することで嵩上げし整地していた（調査18）。

内高嶋の整地方法も明らかとなっている。内高嶋は17世紀の永井尚政時代の木津川付け替え工事の際に埋め立てられて造成されたものである。ここでは、土や砂を互層にして堤状に盛土を築いた後、その両側を粗砂や砂を互層に盛土して造成している（調査21・22）。2015年度の調査では桂川沿いの内高嶋の様相も明らかとなった（調査26）。

二ノ丸の調査は、1976年の西側内堀の試掘調査と1984年の北端部の立会調査（調査４）が行われているのみで、発掘調査は今回が初めてとなる。

文献一覧表（表１　周辺調査一覧表）

1　星野猷二・三木義則『器瓦録想　其ノ三　淀城』伏見城研究会　2007年

2　江谷　寛・三木義則・西野浩二『淀城跡（天守台跡）』伏見城研究会発掘調査報告書2017　伏見城研究会　2017年

3　星野猷二・藤井重夫『淀城跡調査概要Ⅰ』京都市建設局公園管理課・淀城調査団　1988年

4　西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会　1998年

5　中村石材工業株式会社『淀城跡公園石垣改修工事報告書』京都市建設局公園緑地部　1990年

6　久世康博「淀城跡（TB29）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度』京都市文化観光局　1991年

7　馬瀬智光「淀城跡No.21」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成８年度』京都市文化市民局　1997年

8　上村和直「長岡京左京九条四坊」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

9　馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡　No.17」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成15年度』京都市文化市民局　2004年

10　内田好昭「長岡京跡・淀城跡（２次・３次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘

調査報告 2006－3　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年
11　内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003－13　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年
12　「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成15年度』京都市文化市民局　2004年
13　馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡　No.102」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成16年度』京都市文化市民局　2005年
14　「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成18年度』京都市文化市民局　2007年
15　尾藤徳行「長岡京跡・淀城跡（４次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006－3　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年
16　尾藤徳行「長岡京跡・淀城跡（５次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006－23　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007年
17　尾藤徳行・丸川義広・能芝　勉「長岡京跡・淀城跡（６次調査）」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006－23　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007年
18　尾藤徳行・長戸満男・南出俊彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010－7　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2010年
19　尾藤徳行『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010－17　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011年
20　「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成23年度』京都市文化市民局　2012年
21　高橋　潔・菅田　薫・竜子正彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011－7　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012年
22　鈴木久史「Ｘ　長岡京跡第583次・淀城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成27年度』京都市文化市民局　2016年
23　松吉祐希『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017－4　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2017年

３．遺　　構

（１）基本層序（図７）

調査地の地表面の標高は12.0～12.2ｍである。堆積状況は東端とそれ以西で異なる。東端では、現代盛土が0.4ｍほど堆積し、その下に堀に面した石垣の石材を抜き取った際の埋土が西から東へ埋められた状況が確認できた。堀の底部は確認できていない。西半では現代盛土が0.9～１ｍほど堆積し、その直下に淀城築城時の造成土が約1.4ｍ堆積している。また、X=－121,306ラインより以南で、造成土構造確認のため造成土の掘り下げを行った。その結果、造成土中では造成単位となる南北方向の堤状の高まりを確認した。これは粘質土と砂を互層にして積んで構築している。造成土の下は湿地状堆積層となる。

（２）遺構（図６～10、図版１・２）

遺構の時期は淀城期（江戸時代）の１時期である。二ノ丸の東面する石垣及び内堀を検出した。また、石垣の背面には淀城築城時の造成土が堆積しており、調査区西端では、堤状の造成単位の核となる石列を検出した。

石垣１（図８・９、図版１）　地表下1.3ｍで東面する石垣を検出した。検出長は約17ｍ、検出最大高は約1.4ｍであり、主軸方位は北に対して東へ約11度振れている。石材は長軸70～80㎝、中軸40～80㎝、短軸40～60㎝のものが使用され、小口積みで積まれている。石垣の上部は抜き取られており、天端を確認することはできなかった。また、作業の安全性を考慮したため石垣の基底部も確認できなかったが、石は検出された最下段よりもさらに下方に２段は続くことを確認した。矢穴は検出した全35石材中９石に、石材の上面・側面・小面で確認できた。石材は大半が粗割り加工がなされたものである。刻印や墨書が施された石は確認できなかった。

石質は黒雲母花崗岩や石英斑岩といった白色系の石材が大半で、ホルンフェルス・チャートが１石ずつ確認できた。間詰石には砂岩・泥岩・チャートが用いられ、主材に多く用いられている花崗岩は見られない。

裏込めは奥行最大2.5ｍに及び、径10㎝前後の栗石が多く用いられる（図版２）。最奥部に長辺30～40㎝の大きめの石を積み上げて、裏込めと背面の造成土の境としている。裏込めの掘形は存在せず、積み石を数隻積むごとに裏込めと造成土も嵩上げしていると考えられる。

石列２（図10、図版２）　調査区南西隅で検出した二ノ丸の造成土中に構築された堤状遺構の核となる施設である。粘質土を中核として径10～30㎝の石で覆っている。堤の東裾部には最大のも

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
江戸時代	石垣、内堀、石列	

図６　調査区平面図（１：120）

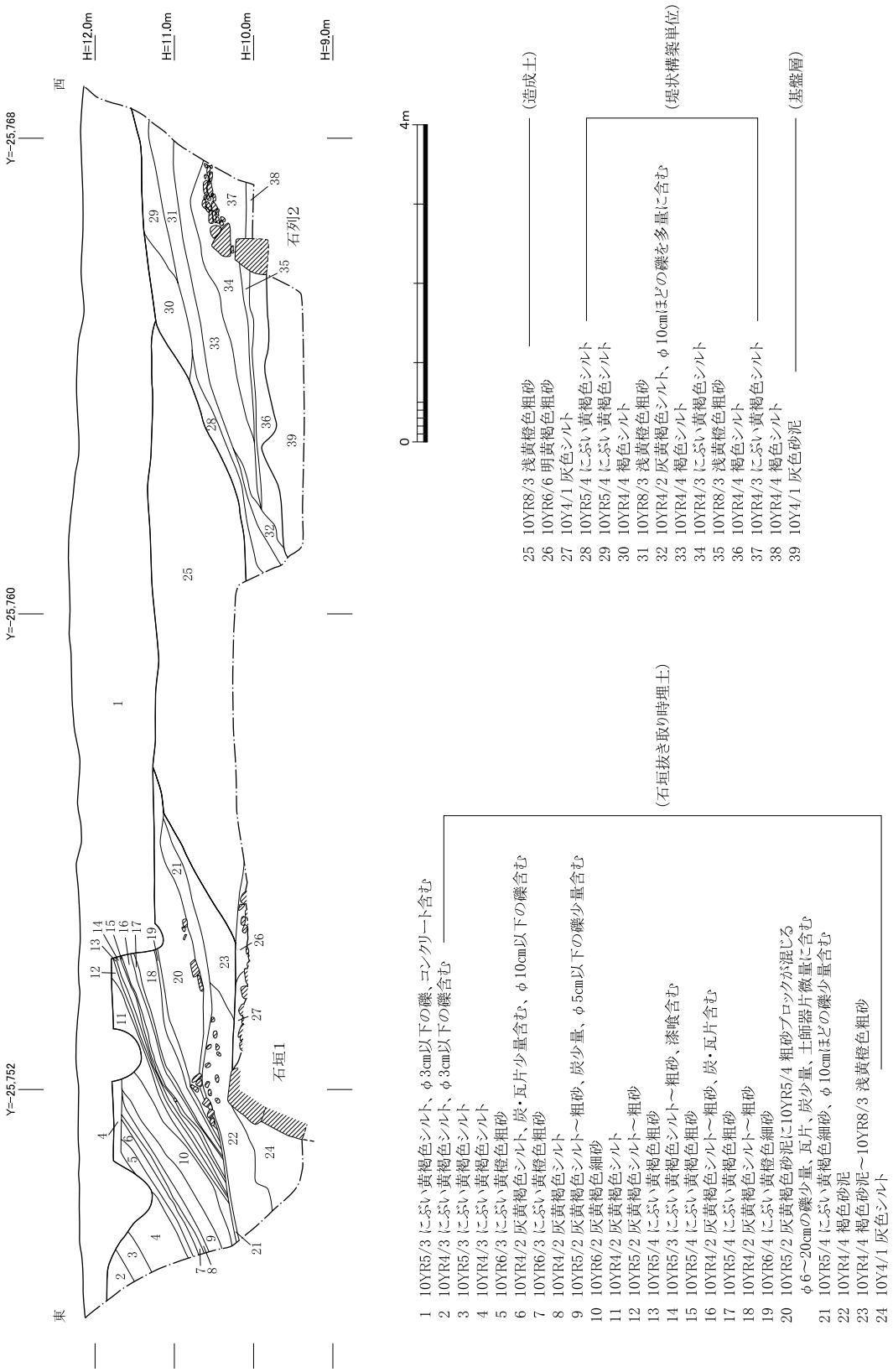


図７　調査区南壁断面図（１：80）

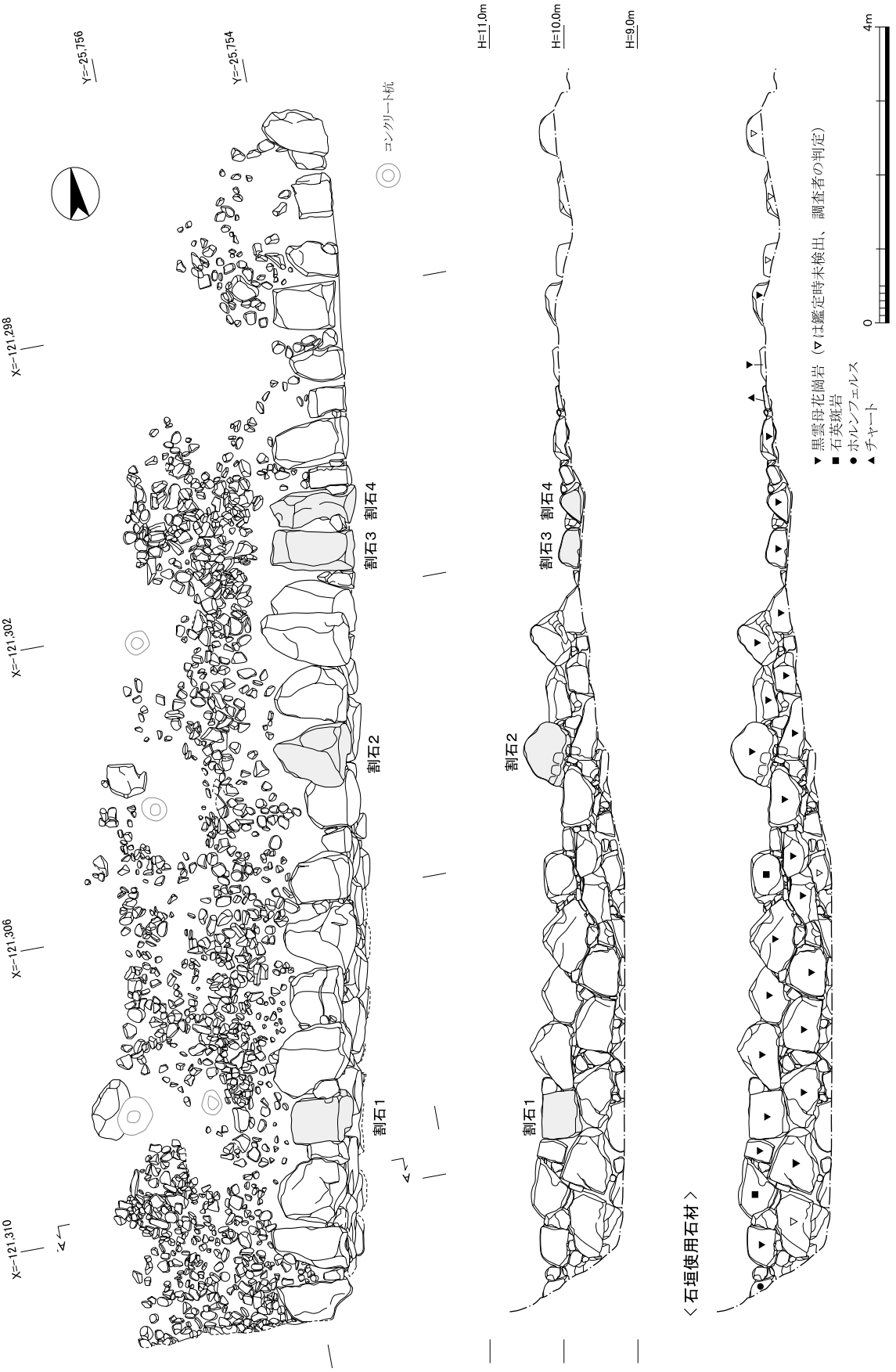


図８　石垣１実測図（１：80）

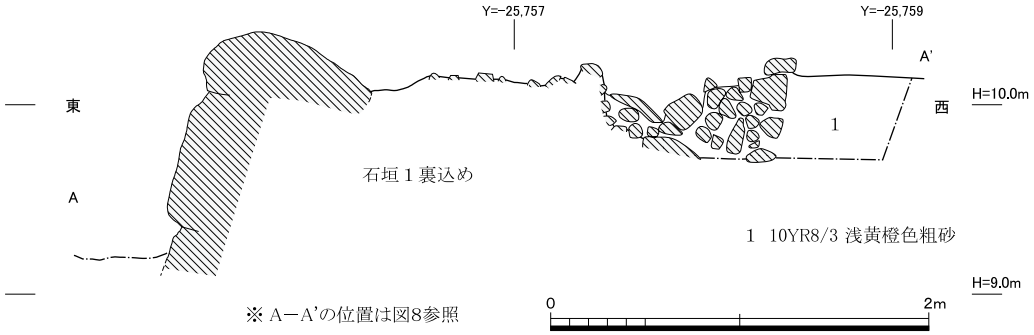


図９　石垣１裏込め断面図（１：40）

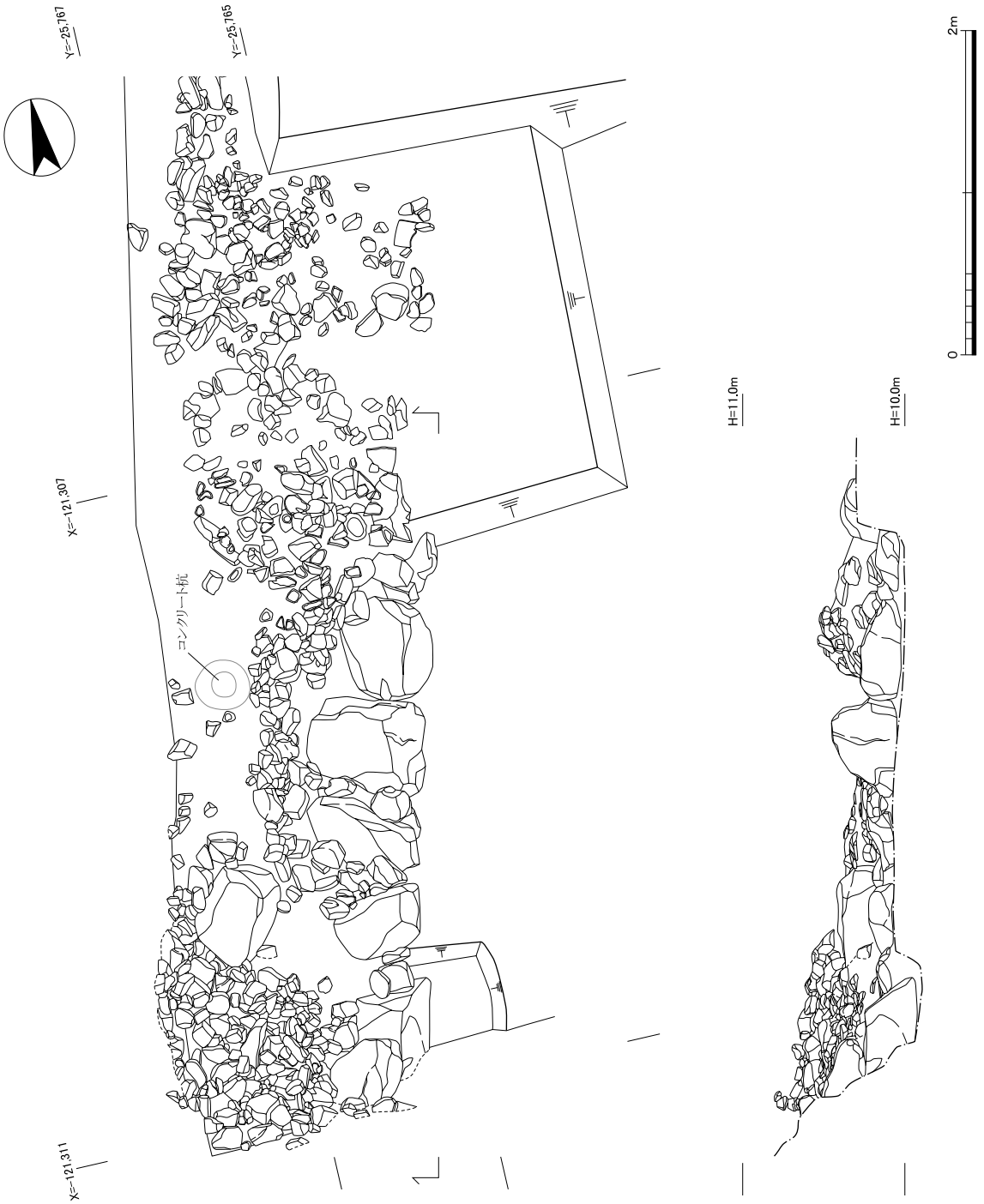


図10　石列２実測図（１：40）

ので長軸70㎝、中軸60㎝、短軸40㎝ほどの大きめの石１段を南北方向に配している。方位は石垣１と同様に東に振れ、その角度は約13度である。なお、調査区の北から約４ｍのところで東西方向に断割りを行ったが、この石列の延長は確認できなかった。

（３）石垣の石材（図11～14）

石垣１の矢穴痕（図11～14）　石垣１に用いられる石材には、石材を割る際に穿つ矢穴痕を残すものがある。ここではその代表的なものについて記す[1)]。

割石１には、石材の上面に２箇所残す。割石２には、小面に３箇所残す。割石３は、南面に５箇所残す。割石４は、上面に２箇所残す。

矢穴１－１は底部が隅丸状を呈し、左右の立ち上がりが下部で内湾する。矢口長辺の長さ12.3㎝、深さ7.1㎝である。矢穴１－２は左半を欠損する。立ち上がりの上部が外反する。矢口長辺の長さは不明で、深さは７㎝である。

矢穴２－１は底部が隅丸状を呈し、立ち上がりが上部で内湾する。矢口長辺の長さは12.5㎝、深さ8.2㎝である。矢穴２－２は底部が隅丸状を呈し、立ち上がりが上部で内湾する。矢口長辺の長さは13.5㎝、深さは10㎝である。矢穴２－３は底部が丸みを帯び、左側立ち上がりが上部で外反する。矢口長辺の長さは17.8㎝、深さは10.3㎝である。

矢穴３－１は、底部が直線的に立ち上がり外傾し、上部が内湾する。矢口長辺の長さは13.1㎝、深さは10.1㎝である。矢穴３－２は立ち上がりは直線的に立ち上がり、上部は右側は外反するが左側は内湾する。矢口長辺の長さは11.8㎝で、深さは11.7㎝である。矢穴３－３は底部が丸みを帯び、立ち上がりは直線的に外傾する。矢口長辺の長さは14㎝、深さは11.1㎝である。矢穴３－４は底部が丸みを帯び、立ち上がりは上半が内湾する。矢穴長辺の長さは11.7㎝、深さは8.2㎝である。矢穴３－５は立ち上がりがほぼ直線的に立ち上がり、上部がやや内湾する。矢口長辺の長さは11.6㎝、深さは11.5㎝である。

図11　割石１（西から）

図12　割石２（東から）

図13　割石３：下、割石４：上（南から）

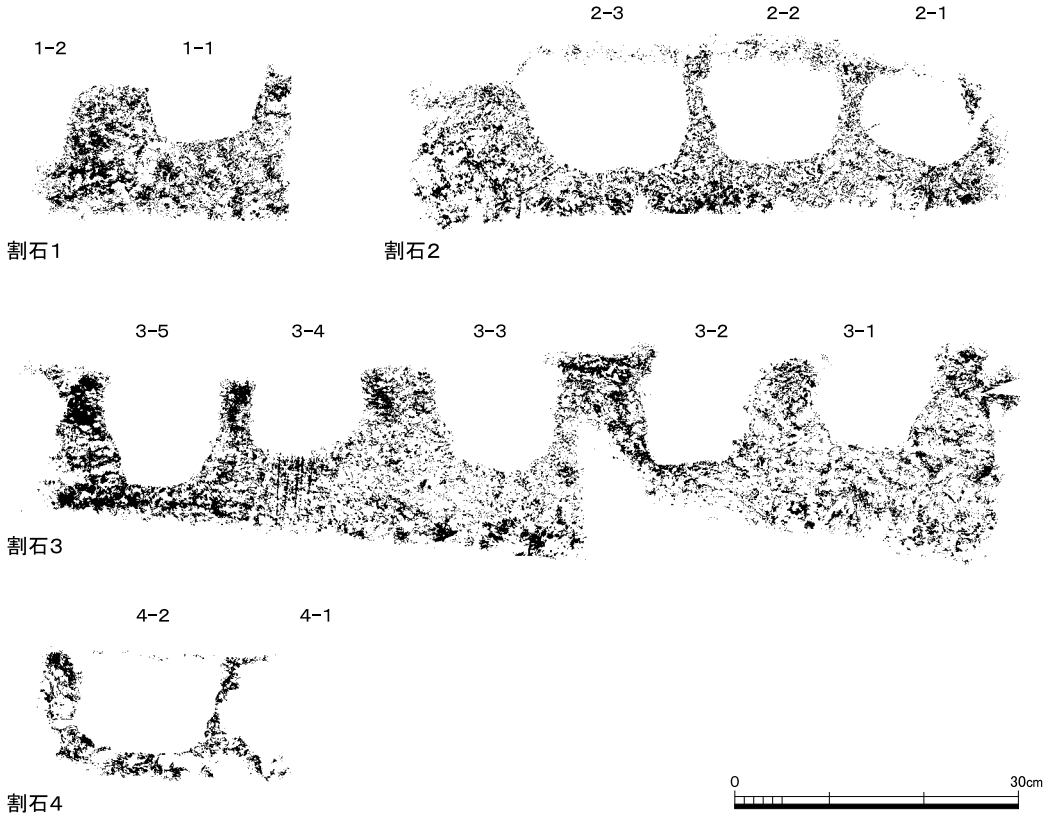


図14　割石矢穴痕拓影（１：８）

矢穴４－１は右半が欠損する。矢口長辺の長さは不明で、深さは9.5㎝である。矢穴４－２は底部が丸みを帯び、立ち上がりは上部がやや内湾する。矢口長辺の長さは13.7㎝、深さは9.7㎝である。

石垣１の石材（図９）　石材には主に黒雲母花崗岩、石英斑岩が用いられており、チャートやホルンフェルスもそれぞれ１石ずつある[2)]。黒雲母花崗岩の内１石に帯状の花崗岩質アプライトが見られるものもある。大半の石材が円磨度[3)]0.3～0.4と低く、角張っている。石材の産地に関しては、黒雲母花崗岩が大文字山・田上山地・行者山、石英斑岩が音羽の滝近辺だと推定される。

註

１）　矢穴については森岡秀人氏が現地でご教示を得た。

２）　石垣の石材鑑定、産地について橋本清一氏にご教示を得た。

３）　0～1.0で表現され、0に近いほど角が鋭く1に近いほど円味が増す。

４．遺　　物

（１）遺物の概要（表３）

遺物は遺物収納コンテナに26箱出土し、整理・分類の過程で31箱に増加した。内容は土器・陶磁器類、瓦類、石製品、金属製品である。出土遺物の約６割を瓦類が占め、その次が土器類である。大半が石垣抜き取り時の埋土から出土したもので、築城時の造成土中からの出土は少数である。

（２）土器類（図15～17、図版３、表４）

淀城期以前の遺物は、調査区西端の築城時の造成土及び裏込めの覆土から出土した。出土量は少ない。江戸時代の土器・陶磁器類は、石垣抜き取り時の埋土から出土した。

裏込め出土土器（図15　１）　１は土師器皿である。外面底部は平坦で、口縁部は指押さえ後に横ナデ。内面は全体に平滑である。成形に型を使用した可能性がある。時期は近世初頭か。

造成土出土土器（図15、図版３　２～４）　２は須恵器の杯Ｂで、口径13㎝、底径9.8㎝、器高3.5㎝である。体部外面から内面にかけナデ成形を施す。胎土に長石・石英・チャート・黒色粒子を含み、焼成は良好である。時期は８世紀後半。３は龍泉窯系青磁の椀で、口径10.8㎝、残存高3.7㎝である。体部外面に細弁化した鎬文を施す。時期は室町時代。４は唐津の皿で、口径13.3㎝、底径4.4㎝、器高3.8㎝である。削り出し高台で、底部内面に目跡が３箇所残る。体部外面から内面にかけナデ成形を施す。

石垣抜き取り時埋土出土土器（図15・16、図版３　５～38）　土器類には土師器、瓦質土器、施釉陶器、染付、焼締陶器、青磁がある。

５～12は土師器皿である。６を除いて内面底部に圏線がめぐり、口径は11.6～12.9㎝である。時期はいずれも江戸時代後期とみられるが、洛中から出土する同時期の土師器皿と異なる特徴を持つものがある。10～12は、厚手で口縁部は底部から丸みを持って立ち上がり、口縁端部に横ナデ

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
長岡京期	須恵器		須恵器１点		
室町時代	土師器、施釉陶器、青磁、瓦類、石製品		青磁１点、石製品２点		
江戸時代	土師器、瓦質土器、施釉陶器、染付、焼締陶器、青磁、瓦類、土製品、金属製品		土師器15点、瓦質土器１点、施釉陶器８点、染付８点、焼締陶器１点、青磁３点、軒丸瓦14点、軒平瓦９点、菊丸瓦５点、平瓦１点、鬼瓦１点、土製品２点、金属製品６点		
合　計		31箱	78点（６箱）	１箱	24箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より５箱多くなっている。

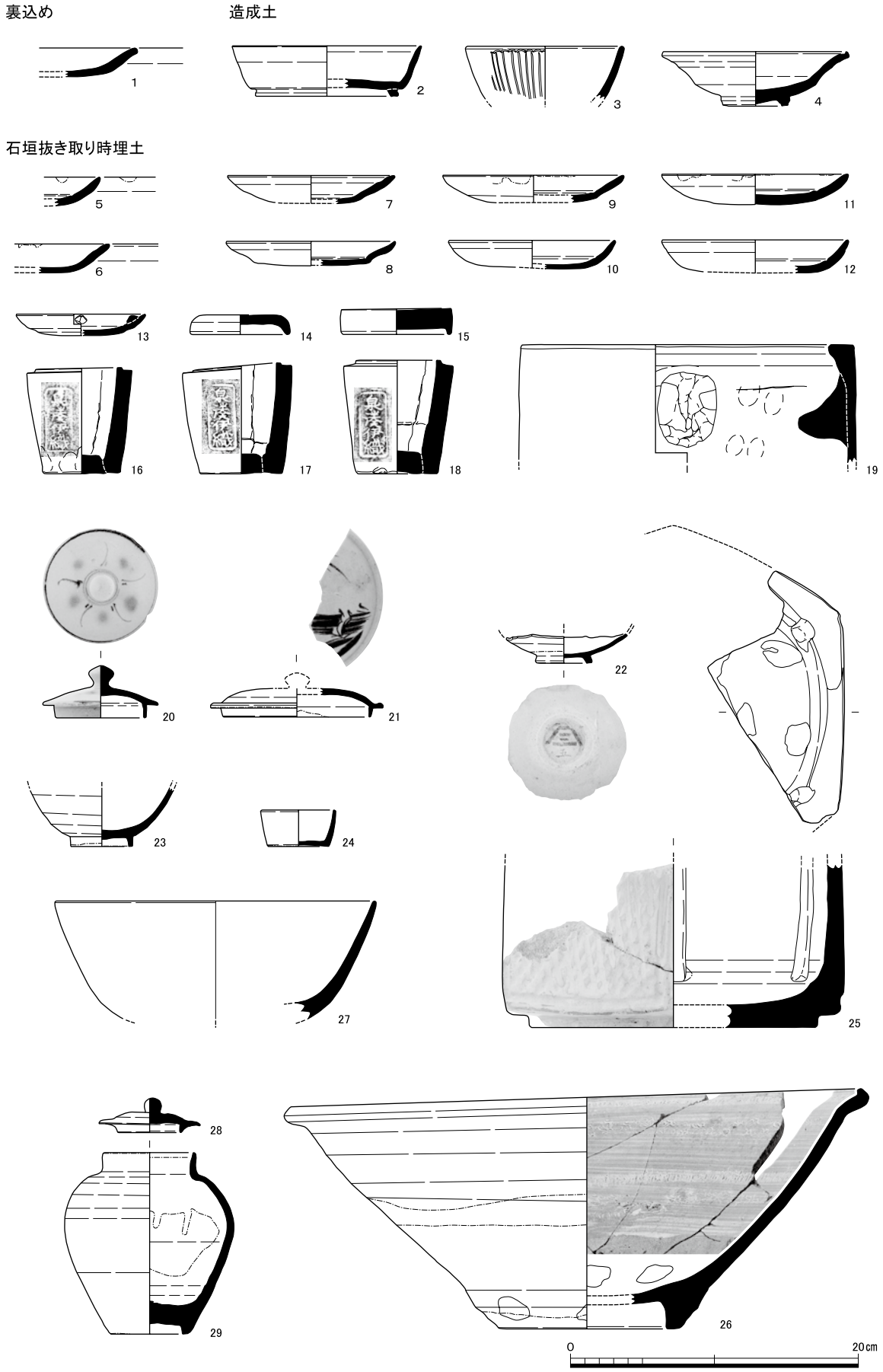


図15　出土土器実測図１（１：４）

石垣抜き取り時埋土

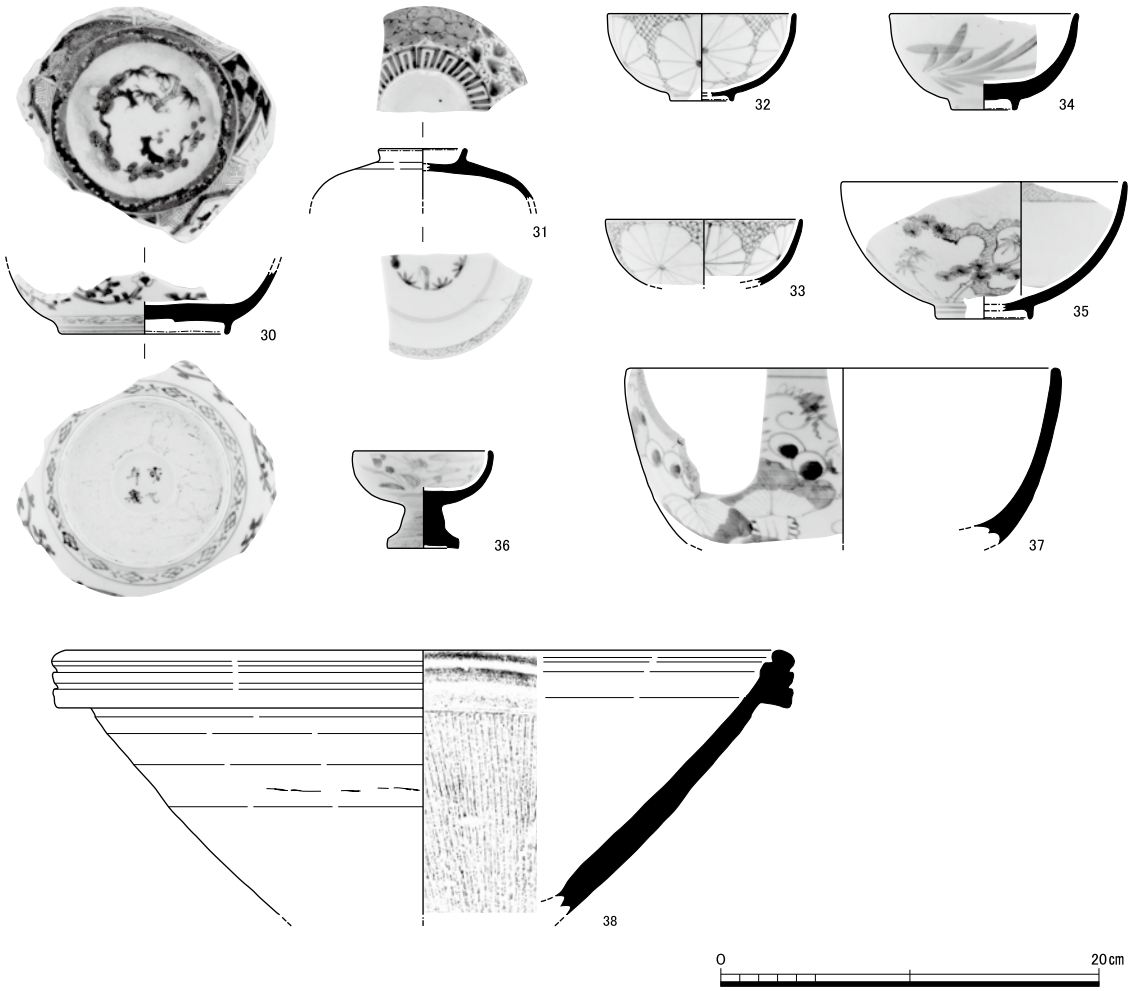


図16　出土土器実測図２（１：４）

を施す。洛中出土の鎌倉時代前半の土師器皿の形態に近いが、内面に沈線を施しており、この時期のものとみられる。13は土師質の灯明受け皿で内外面に透明の釉薬が塗られる。14・15は塩焼壷の蓋である。15の内面には布目痕がみられる。16～18は塩焼壷で、いずれも体部外面に「泉湊伊織」の刻印が施される。江戸時代中期のものである。19は瓦質土器の焜炉である。円筒形で口縁端部内側が肥厚する。内面上部に角状突起が貼り付けられる。復元口径は23.0㎝。内面と口縁部にススが付着し、口縁部と突起部は磨滅していない。20～26は施釉陶器である。20～25は京・信楽焼系。20・21は土瓶の蓋である。22は皿である。高台内の「□（山形の中に）三五」の墨書がある。墨書は「山形」と「三」が太く、「五」は細い。23は椀である。底径4.2㎝、残存高4.1㎝である。24は杯である。口径5.1㎝、底径4.2㎝、器高2.5㎝である。25は六角柱形の鉢である。体部外面に格子状にケズリをいれ施釉する。底部内面には胎土目が残る。26は唐津の三島手印花文大平鉢である。内面の印花は白泥を象嵌する。27～29は肥前産の青磁。27は鉢である。口径22.0㎝、残存高8.2㎝である。28の蓋はつまみを貼り付ける。29は蓋付壷である。底部から体部下半にかけて回転ケズリ、体部上半から口縁にかけてはロクロナデによる成形を施す。口径6.2㎝、底径5.4㎝、器高12.6㎝である。30～37は肥前産染付である。30は鉢である。高台の内側は、窪んだ中央部を除き

施釉後に掻き取り、中央部に「成化年製」の銘が入る。見込みには松竹梅円形文が描かれる。江戸時代中期のものと考えられる。31は蓋である。32～35は椀である。32・33は内外面に菊散らし文を描く。34は外面に草文、35は外面に松を描く。36は仏飯具である。体部外面に草花文が描かれる。37は鉢である。38は明石系の焼締陶器擂鉢である。体部内面に11本を1単位とする密な擂目を施す。口縁部外面に縁帯をもつ。

（3）瓦類（図18・19、図版４、表５）

瓦類は、大半が石垣抜き取り時の埋土から出土し、少数が築城時の造成土から出土した。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、菊丸瓦、鬼瓦がある。

軒丸瓦（図17、図版４　39～52）

軒丸瓦は14点出土した。全て右巻き三巴文で外区に珠文をめぐらせる。瓦当裏面下半部を周縁部に沿って横ナデを施す瓦が多く、瓦当下半部が残る40～43・46・47・49～52の内、40・46を除いてすべてに認められる。軒丸瓦は、瓦当部と丸瓦部の接合角度、胎土、瓦当面に残る離着材のキラ粉の存在などから、古相と新相に分かれ、おおよそ17世紀代と18世紀代と思われる。

39～45は古相の軒丸瓦で、瓦当面にキラ粉は付着しない。42・45は瓦当部と丸瓦部が角度をもって接合される。これは瓦当上端部よりやや下の瓦当裏面で丸瓦を接合するためである。胎土はやや粗く、砂粒を一定量含む。41・43は巴の尾部が長く伸びて圏線状となる。44・45は瓦当径が他のものよりも大きい。

46～52は新相の軒丸瓦で、瓦当面にキラ粉が付着する。48・51・52は瓦当部と丸瓦部の接合部には角度が存在しない。これは瓦当裏面上端部付近で丸瓦を接合するためである。胎土はやや精良で、砂粒をほとんど含まない。これらの中に同笵瓦は認められないが、巴や珠文の大きさが近似するものが多い。

軒平瓦（図18、図版４　53~61）

軒平瓦は９点出土したが、残存状態が良いものは少ない。いずれも唐草文である。53～55は中心文が上向五葉形で、唐草は３転する。相国寺旧境内遺跡出土[1)]のNH1098と類似する。また、いずれも瓦当面周縁の上端部を横方向にヘラケズリを施す。56・57は唐草文を複線で表す。57～59は瓦当面の幅がやや大きく、瓦当部は一定の厚さを持つ。59は瓦当面周縁の上端部を横方向にヘラケズリを施し、瓦当と平瓦の接着部にカキヤブリが見られる。60・61は小片であり詳細は不明であるが、61は瓦当面の幅が他のものよりも小さい。

菊丸瓦（図18、図版４　62～66）

菊丸瓦は５点出土した。星野猷二氏・三木善則氏の分類[2)]によれば、今回出土した菊丸瓦は、直径が全て10㎝を超えていることから、いずれも淀城築城時のものとなる。以下の型式分類は星野・三木分類による。62はＣ型式。無周縁で八弁二重菊文。63はＧ型式である。十一弁二重の菊文。中央にボタン状の中房を持つ。64と65はＨ型式である。十六弁菊文で花弁先端が尖った２重で表される。66は十二弁菊文である。無周縁でボタン状の中房を持つ。

その他の瓦（図18、図版４　67・68）

その他の瓦として平瓦（67）と鬼瓦（68）がある。67は全面にイブシが均質に施される。凹面の右端部はヘラケズリにより面取りされる。凹面に「くすは平右衛門」の刻印が施される。68は瓦当部左上外縁部のみが残存する。外縁部に縦方向ヘラケズリ後にナデを施す。

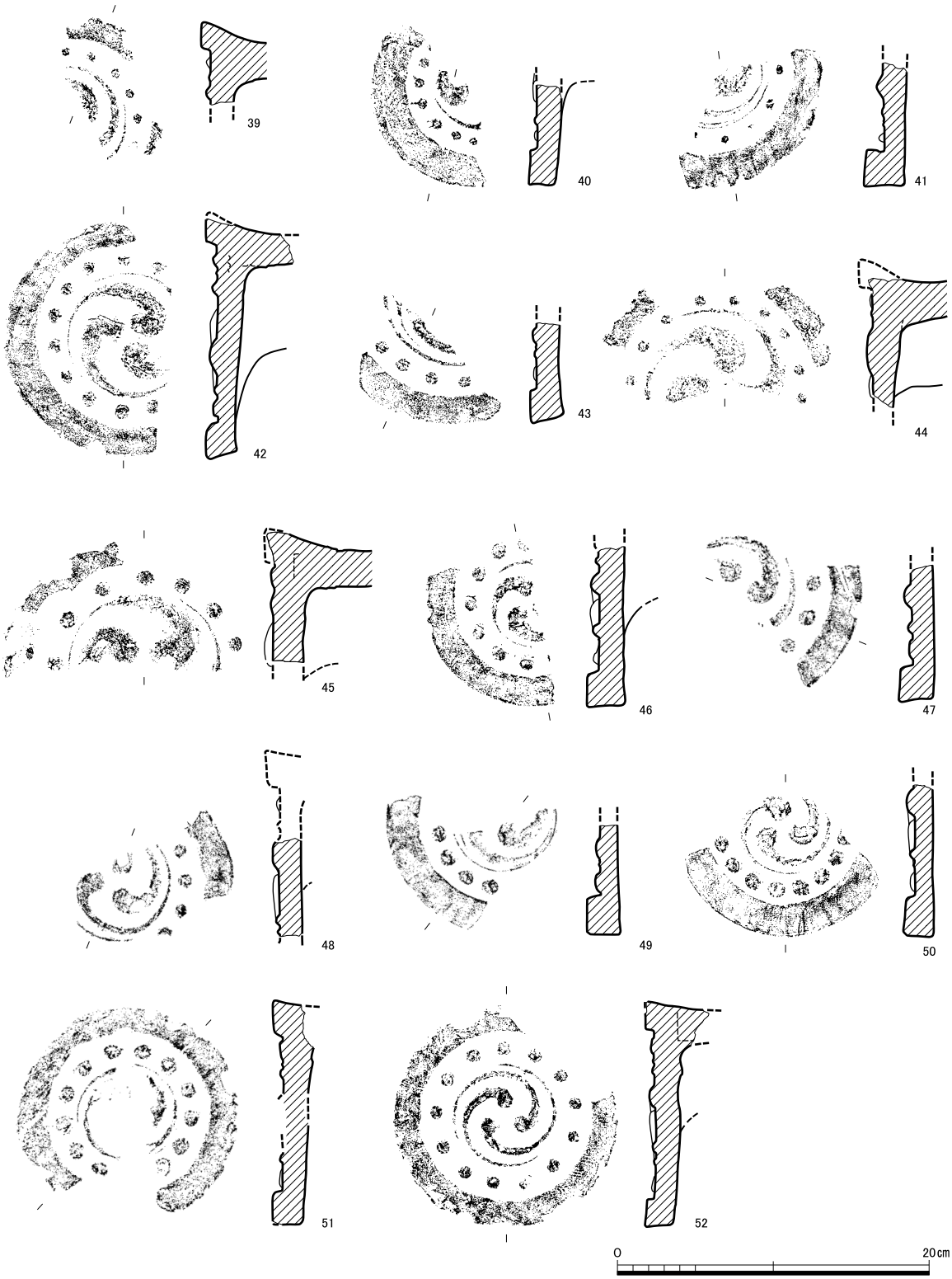


図17　軒丸瓦拓影及び実測図（１：４）

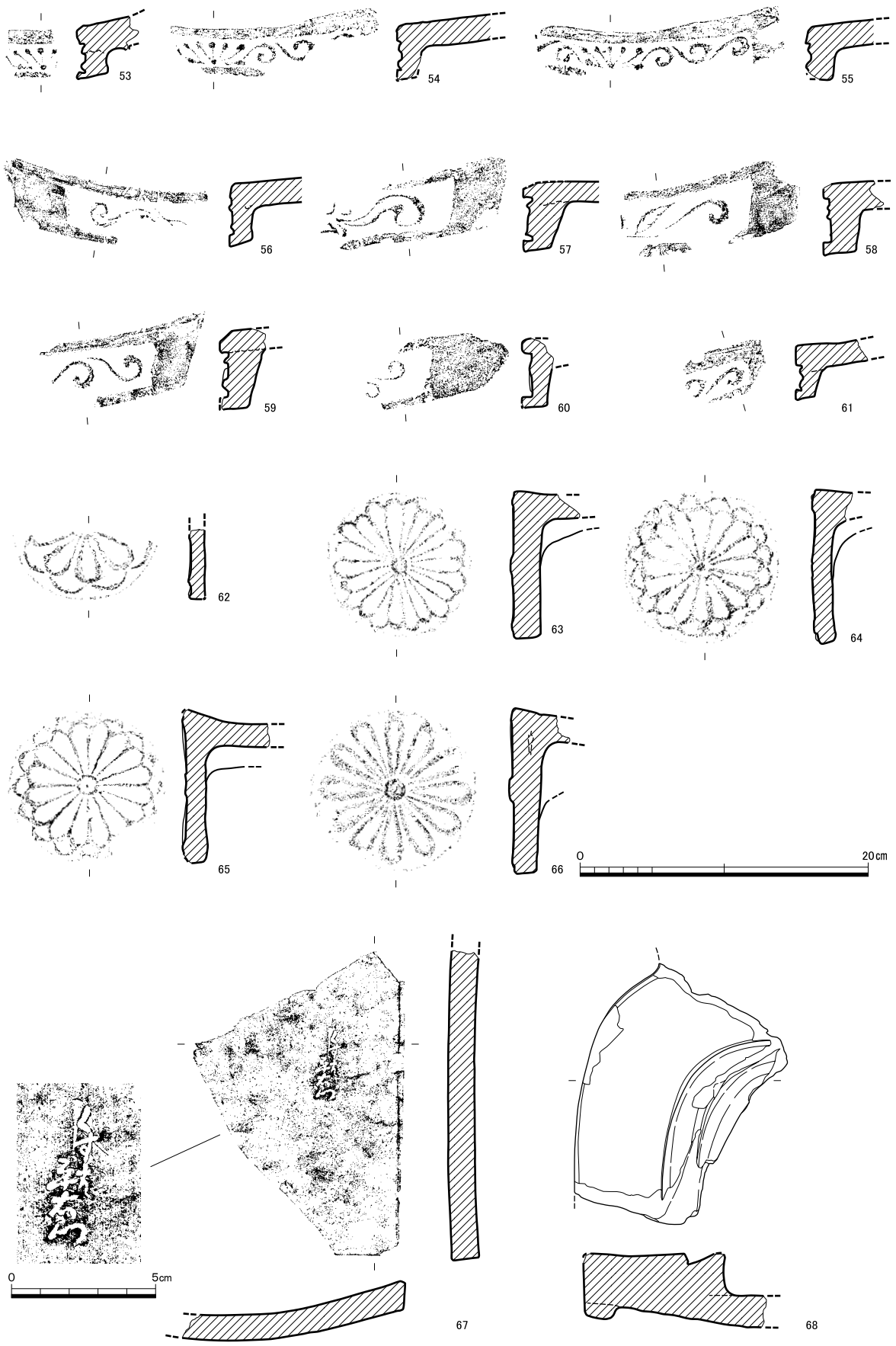


図18　軒平瓦・菊丸瓦・その他の瓦拓影及び実測図（1：4）

（４）土製品（図19）

土製品はいずれも現代盛土から出土した。

69は鳥型の土製品である。底部には径0.6㎝の穴が空けられる。

70は脚部である。形状から牛の脚だと考えられる。

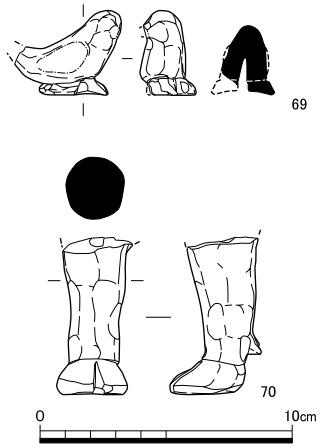


図19　土製品実測図（１：４）

（５）石製品（図20）

石製品はいずれも造成土から出土した。

71は石仏である。残存長約55㎝、最大幅約29㎝、最大の厚さ約18㎝である。花崗岩に坐像を彫刻する。基底部を欠く。

72は五輪塔である。花崗岩製で風輪と空輪を一石からつくる。下端には組み合わせのための突起を作り出す。最大径15.6㎝。

（６）金属製品（図21・22）

ほとんどが石垣抜き取り時の埋土から出土した。74は重機掘削中に出土した。

銭貨は計３枚出土した。73は天聖元寳で2.5×2.5㎝、重さ4.0ｇ。74・75は寛永通寳である。74は2.5×2.5㎝、重さ3.1ｇ。75は2.4×2.4㎝、重さ2.2gである。

76・77はキセル吸口である。76は鉄製で、長さ5.8㎝、幅0.3～1.0㎝、重さ4.3ｇである。77は銅製で長さ8.3㎝、幅0.3～0.9㎝、重さ6.4ｇある。肩から吸口にかけて屈曲する。

78は懐中鏡である。縦7.1㎝、横4.9㎝、厚さ1.5㎜（縁は2.0㎜）、重さ28.151gである。荒磯、楼閣、松、杉などのモチーフから構成され、「天下一作」の銘が彫られる。蛍光Ｘ線分析を龍谷大学の北野信彦氏に依頼し、その結果、鏡の主成分は銅・錫・ヒ素・鉛であることが判明した。

註

１）『相国寺旧境内発掘調査報告書　今出川キャンパス整備に伴う発掘調査　第４次～第６次』同志社大学歴史資料館調査研究報告書第13集　2015年

２）星野猷二・三木善則『器瓦録想　其の三　淀城』伏見城研究会　2007年

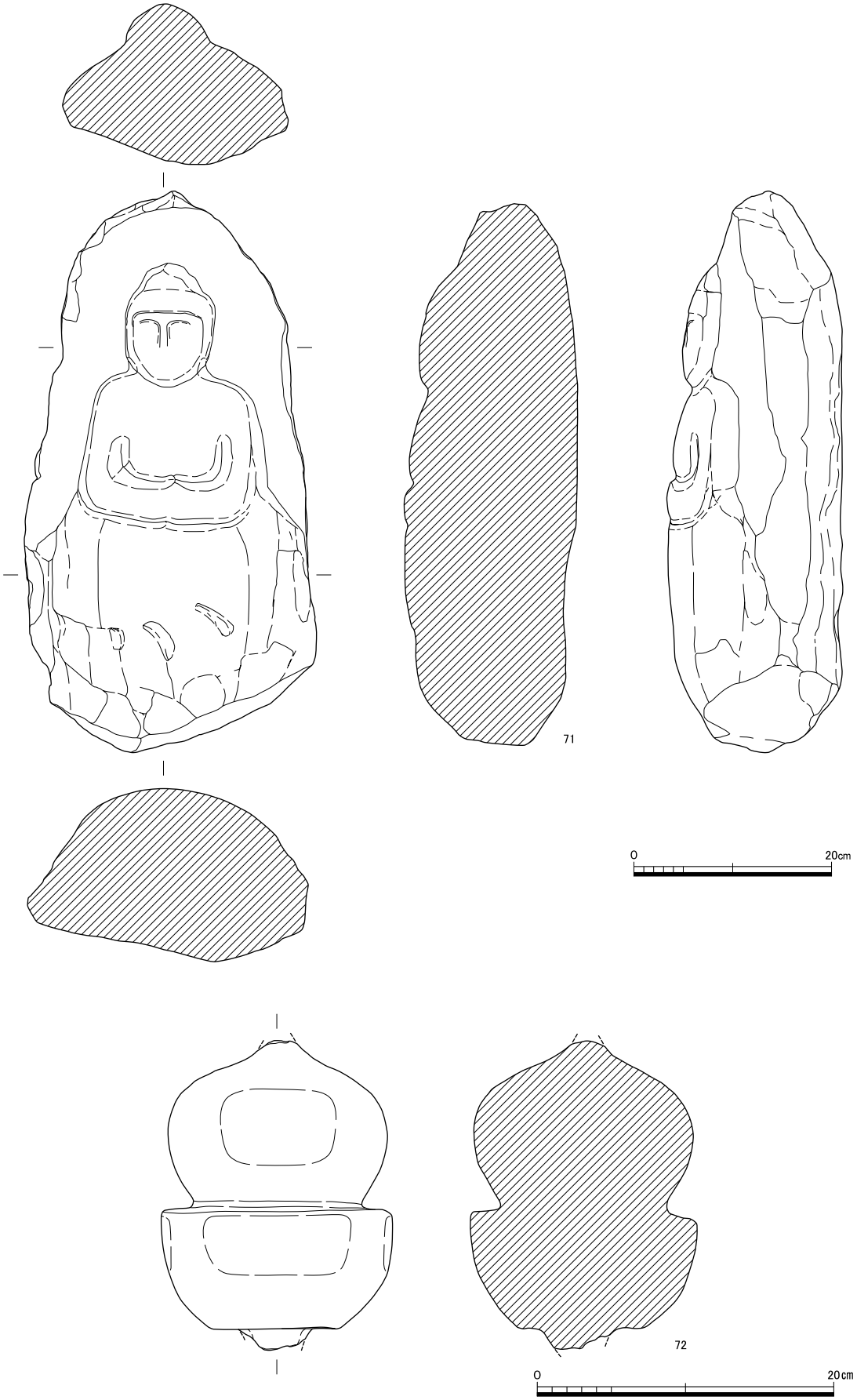


図20　石製品実測図（石仏１：６、五輪塔１：４）

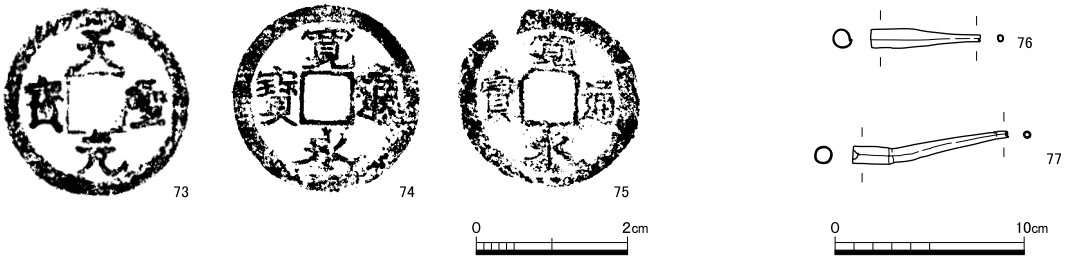


図21　銭貨拓影（1：1）、金属製品実測図（1：4）

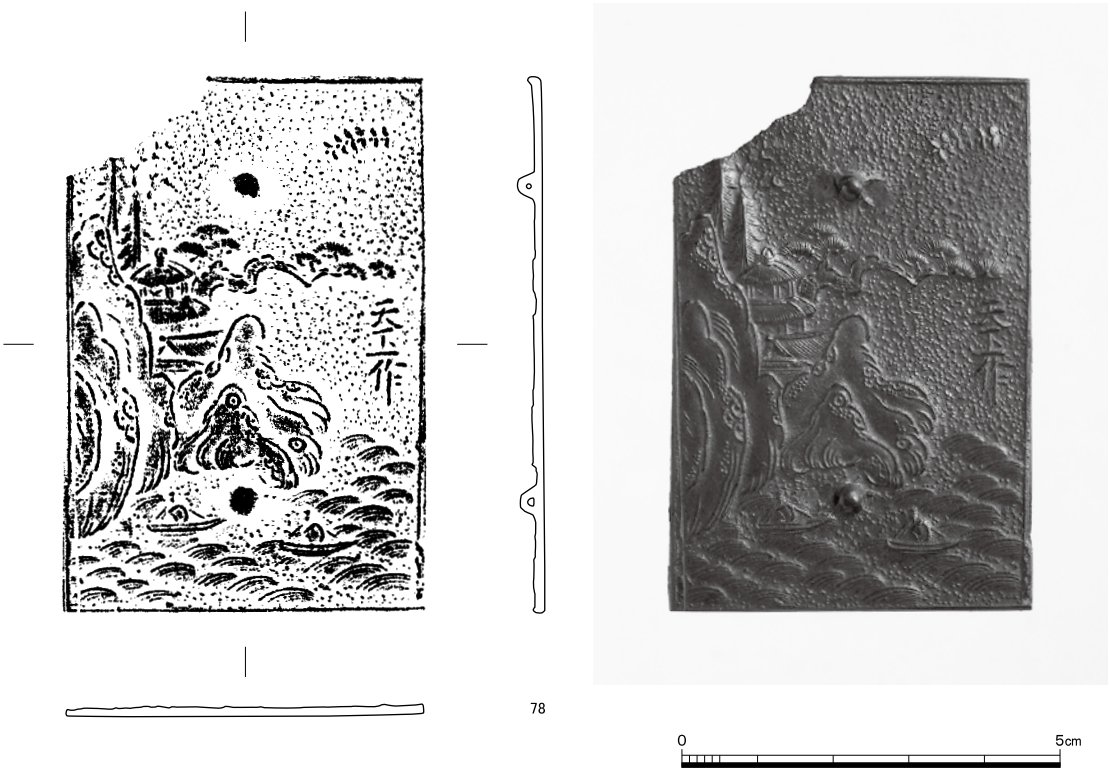


図22　懐中鏡実測図・写真（1：1）

5．まとめ

今回の調査地には、近世の絵図[1)]などから淀城二ノ丸の東面する石垣及び内堀の検出が期待された。調査の結果、淀城二ノ丸東限の堀西肩部の石垣を検出し、これまで推定されていただけであった二ノ丸の掘の位置を確定することができた。

今回検出した石垣は、南北延長17ｍ、石積は２段分、高さ1.4ｍ分を検出した。石垣の上部は近代になって抜き取られており、さらに基底部も確認できていないので本来の高さは不明である。ただし、下部にはさらに２段程度の石材が埋没していること、調査区南壁で確認した抜き取り痕跡から、検出した石垣の上部に1.4ｍは石積みが存在したことが確認できた。本来は少なくとも高さ４ｍはあった石垣の中位を検出したと考えられる。

石の積み方に関しては、いわゆる布積みと呼ばれる形式を基本としている。しかし、石材の大きさは大小さまざまであり、横目地が揃わない箇所もある。石垣の傾斜度は77度程度であるが、ソリの有無については、石垣の上部と下部を検出していないことから不明である。また、石材には加工するために穿たれた矢穴が存在するものがいくつか認められる。矢穴の形式は大半が森岡分類のＡタイプに相当する。同一矢穴列中にサイズの異なるものが存在するが、こうした特徴は、慶長期前半の特徴を示していると考えられている[2)]。

以上のことから、今回検出した石垣の石材は松平氏による淀城築城時に新調したものではなく、伏見城の廃城石を転用したものの可能性が高く、また石垣には補修や改修の痕跡は認められないことから、築城時からその場所を変えていないと考えられる。

上記のように二ノ丸の石垣は、伏見城の石材を再利用していることが明らかとなった。本丸天守台の石垣も同様に伏見城の石材の利用の可能性が指摘されている[3)]。しかし、淀城本丸天守台には、鞍馬・加茂・山科・宇治・白川・六甲など多くの石材の産地や種類が認められる[4)]が、今回検出した石垣に用いられる石材は黒雲母花崗岩が大半で、石材の種類は限られている[5)]。また、本丸天守台の石垣には多くの刻印や墨書が残されているが、今回検出した石垣ではそれらを確認することはできなかった。これらの本丸との差異の原因ついては更なる検討が必要である。

さらに、石垣背面の土地造成の方法に関しても明らかになった。調査区南西隅で検出した石列２を中核とする堤状遺構と石垣との間を砂で充填する方法で、過去の調査（調査18・21・22など）で確認されている土地の造成と共通点がみられる。低湿地に造営された淀城及びその城下町の造成方法の解明は、今後の検討課題としたい。

註

１）　西川幸治編『淀の歴史と文化』　淀観光協会　1996年
近世の淀城を描いた絵図として、江戸時代中期の『(淀城ノ図)』『(淀城下全図)』などがあり、上記文献に所収されている。

２）　森岡秀人・藤川祐作「矢穴の形式学」『古代学研究－森浩一先生傘寿記念論文集－』第180号　405–

418頁　2008年

先Ａタイプは矢穴幅が細身で、平面形は小判形、扁楕円形、矢穴底部は丸底、舌状あるいは船底状を呈する。古Ａタイプは、矢穴長辺長に大きなばらつきがあり、左右不釣合いとなる。Ａタイプは、元和～寛永期に広く普及したタイプのもので、矢穴口の平面形が矩形もしくは隅丸長方形、断面が逆台形を呈する。Ｃタイプは近世後半以降にかけて普及したタイプで、長辺6㎝未満、短辺４～５㎝、深さ6㎝未満の小型の矢穴である。ＢタイプはＡタイプとＣタイプの中間的な様相を示す。

３）　藤井重夫「石垣の石材と石垣に残る刻印」『器瓦録想　其の三　淀城』伏見城研究会　2007年

４）　註３）に同じ。

５）　調査期間中に石垣の観察を行った森岡秀人氏によれば、今回の調査で検出された石垣の石材で最も多いのは７割を占める花崗斑岩・石英斑岩であり、過少ながら玄武岩質凝灰岩（デイサイト）も存在する。これらはいずれも山科大岩・小山の石切場に存在するもと指摘されており、石材の調達場として注目される。

また、森岡氏からは石垣全般に亘って有益なご教示を頂いている。それらは筆者の浅学により、充分に活かしきれていない。お詫び申し上げると共に謝意を表したい。

参考文献

中井　均「近世城郭の石切場」『季刊考古学』第103号　雄山閣

西川幸治編『淀の歴史と文化』　淀観光協会　1996年

星野猷二・三木善則『器瓦録想　其の二　伏見城』伏見城研究会　2006年

表４　土器一覧表

番号	器種	器形	出土位置	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	色調	胎土
1	土師器	皿	裏込め			2.0	13	10YR8/2 灰白色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャートを含む
2	須恵器	杯	造成土	13.0	9.8	3.5	33	N7/0 灰白色	蜜、φ1mm以下の長石・石英・黒色粒子含む
3	青磁	椀	造成土	10.8		残高3.7	15	釉:10Y6/8 オリーブ灰色 胎土:N8/0 灰色	密
4	施釉陶器	皿	造成土	13.3	4.4	3.8	60	釉:5YR6/1 灰色 胎土:2.5Y8/1 灰白色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャートを含む
5	土師器	皿	石垣抜き取り時埋土			2,0	13	5YR4/6 赤褐色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャートを含む
6	土師器	皿	石垣抜き取り時埋土			2.0	13	7.5YR8/4 浅黄橙色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャート含む
7	土師器	皿	石垣抜き取り時埋土	11.6		2.0	20	7.5YR7/6 にぶい橙色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキを含む
8	土師器	皿	石垣抜き取り時埋土	11.7		1.7	25	10YR8/2 灰白色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキを含む
9	土師器	皿	石垣抜き取り時埋土	12.6		1.9	25	7.5YR8/3 浅黄橙色	密、φ2mm以下の長石・石英・チャート・クサリレキを含む
10	土師器	皿	石垣抜き取り時埋土	11.5		2.0	34	7.5YR7/4 にぶい橙色	密、φ2mm以下の長石・石英・チャートを含む
11	土師器	皿	石垣抜き取り時埋土	12.9		2.1	34	7.5YR8/3 浅黄橙色	密、φ2mm以下の長石・石英・チャートを含む
12	土師器	皿	石垣抜き取り時埋土	12.9		2.3	25	7.5YR8/4 浅黄橙色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャートを含む
13	土師器	灯明受皿	石垣抜き取り時埋土	9.0		1.5	25	5YR7/4 にぶい橙色	密、φ1mm以下の長石・石英を含む
14	土師器	塩焼壷蓋	石垣抜き取り時埋土	6.5		1.4	48	7.5YR7/3 にぶい橙色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャートを含む
15	土師器	塩焼壷蓋	石垣抜き取り時埋土	7.2		1.8	100	5YR7/6 橙色	密、φ2mm以下の長石・石英・チャートを含む
16	土師器	塩焼壷	石垣抜き取り時埋土	5.3	5.2	7.4	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	密、φ2mm以下の長石・石英・チャートを含む
17	土師器	塩焼壷	石垣抜き取り時埋土	5.4	5.8	7.7	100	7.5YR7/4 にぶい橙色	密、φ2mm以下の長石・石英・チャートを含む
18	土師器	塩焼壷	石垣抜き取り時埋土	5.3	5.5	7.9	100	10YR8/4 浅黄橙色	密、φ2mm以下の長石・石英・チャートを含む
19	瓦質土器	焜炉	石垣抜き取り時埋土	23.0		残高8.2	20	N4/0 灰色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャート・雲母含む
20	施釉陶器	蓋	石垣抜き取り時埋土	6.0		3.6	100		
21	施釉陶器	蓋	石垣抜き取り時埋土	10.0		残高2.0	25	素地:N7/0 灰白色 釉:10Y7/1 灰白色、明緑色、錆茶	密
22	施釉陶器	皿	石垣抜き取り時埋土		3.9	残高2.0	75	釉:5Y8/2 灰白色 胎土:2.5Y8/2 灰白色	密
23	施釉陶器	椀	石垣抜き取り時埋土		4.2	残高4.1	60	釉:2.5Y8/2 灰白色 胎土:10YR8/3 浅黄橙色	
24	施釉陶器	杯	石垣抜き取り時埋土	4.9	4.2	2.5	90	素地:2.5Y8/3 淡黄色 釉:2.5Y8/2灰白色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャート含む
25	施釉陶器	鉢	石垣抜き取り時埋土		19.8	残高11.3	15	釉:7.5Y8/1 灰白色、5BG7/1 明青色 胎土:2.5Y8/1 灰白色	密、φ1mm以下の長石・石英・チャートを含む
26	施釉陶器	鉢	石垣抜き取り時埋土	39.0	12.8	16.6	45	素地:2.5YR5/4 にぶい赤褐色	密、φ2mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子含む
28	青磁	壷蓋	石垣抜き取り時埋土	4.3		2.4	90	釉:10GY8/1 明緑色 胎土:10YR8/2 灰白色	密
29	青磁	壷	石垣抜き取り時埋土	6.2	5.4	12.6	95	釉:10GY8/1 明緑色 胎土:N8/0 灰白色	密
27	青磁	鉢	石垣抜き取り時埋土	22.0		残高8.2	70	N8/0 灰白色	密
30	染付	皿	石垣抜き取り時埋土		8.7	残高3.4	65	釉:呉須、上絵:朱・金色 胎土:N8/0 灰白色	密
31	染付	蓋	石垣抜き取り時埋土			残高2.7	35	釉:呉須 胎土:N8/0 灰白色	密
32	染付	椀	石垣抜き取り時埋土	9.9	3.2	5.6	40	釉:呉須 胎土:N8/0 灰白色	密
33	染付	椀	石垣抜き取り時埋土	10.3		残高3.5	40	釉:呉須 胎土:N8/0 灰白色	密
34	染付	椀	石垣抜き取り時埋土	9.8	3.1	5.1	60	釉:呉須 胎土:N8/0 灰白色	密
35	染付	椀	石垣抜き取り時埋土	14.9	4.8	7.2	20	釉:呉須 胎土:N8/0 灰白色	密
36	染付	仏飯具	石垣抜き取り時埋土	7.1	3.8	5.2	100	素地:N8/0 灰白色 釉:呉須	密
37	染付	鉢	石垣抜き取り時埋土	22.4		残高9.3	10	釉:呉須 胎土:N8/0 灰白色	密
38	焼締陶器	擂鉢	石垣抜き取り時埋土	17.7		残高14.0	12	2.5YR6/6 橙色	密、φ2mm以下の長石・石英・チャート含む

表５　瓦一覧表

番号	種類	文様	色調・胎土	調整・特長	出土位置
39	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、胎土密、φ5mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面ヨコナデ、丸瓦凹面に布目、凸面に縦方向のナデ	造成土
40	軒丸瓦	巴文	外面N5/0灰色、胎土密、φ5mm以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当裏面、周囲ヨコナデ	表採
41	軒丸瓦	巴文	外面10Y8/1灰白色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当裏面、周囲ヨコナデ	造成土
42	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英含む	瓦当表面外縁、裏面ヨコナデ	表採
43	軒丸瓦	巴文	外面7.5Y6/1灰色、胎土密、φ5mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面、周囲ヨコナデ	攪乱
44	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、胎土密、φ5mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面ヨコナデ、丸瓦凹面に布目、凸面に縦方向のナデ	石垣抜き取り時埋土
45	軒丸瓦	巴文	外面N6/0灰色、胎土密、φ5mm以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当裏面ヨコナデ、丸瓦部凹面布目のち横方向ケズリ、凸面縄目のち縦方向のナデ、丸瓦との接着部にカキヤブリ	石垣抜き取り時埋土
46	軒丸瓦	巴文	N5/0灰色、胎土密、φ3mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面、周囲ヨコナデ	遺構検出
47	軒丸瓦	巴文	N5/0灰色、胎土密、φ3mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面ヨコナデ	石垣抜き取り時埋土
48	軒丸瓦	巴文	外面7.5Y8/2灰白色、胎土密、φ3mm以下の長石・石英を含む	瓦当表面にハナレズナ付着、裏面ヨコナデ	攪乱
49	軒丸瓦	巴文	N5/0灰色、胎土密、φ3mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面ヨコナデ、瓦当裏面に横方向の線刻	石垣抜き取り時埋土
50	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、胎土密、φ5mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面、周囲ヨコナデ	石垣抜き取り時埋土
51	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、胎土密、φ5mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面ヨコナデ、丸瓦との接着部にカキヤブリ	石垣抜き取り時埋土
52	軒丸瓦	巴文	外面N4/0灰色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英含む	瓦当裏面丸瓦接合部と周縁部ナデ、外縁を面取りする	石垣抜き取り時埋土
53	軒平瓦	唐草文	外面N7/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英を含む	瓦当上面面取り、瓦当顎部、裏面ヨコナデ、平瓦との接着部にカキヤブリ	造成土
54	軒平瓦	唐草文	外面10Y8/2灰白色～7.5Y6/1灰色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英を含む	瓦当表面外縁、瓦当裏面ヨコナデ	造成土
55	軒平瓦	唐草文	外面N5/0灰色、胎土密、φ5mm以下の長石・石英・を含む	瓦当表面外縁、裏面ヨコナデ	造成土
56	軒平瓦	唐草文	外面10Y6/1灰色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面、顎部ナデ	石垣抜き取り時埋土
57	軒平瓦	唐草文	外面N3/0暗灰色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当裏面、顎部ナデ、平瓦との接着部にカキヤブリ	石垣抜き取り時埋土
58	軒平瓦	唐草文	N8/0灰白色、胎土密、φ3mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面ヨコナデ	石垣抜き取り時埋土
59	軒平瓦	唐草文	外面N4/0灰色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面、顎部ナデ	石垣抜き取り時埋土
60	軒平瓦	唐草文	外面N7/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面ヨコナデ	石垣抜き取り時埋土
61	軒平瓦	唐草文	外面N5/0灰色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英を含む	瓦当外縁、裏面ヨコナデ	造成土
62	棟丸瓦	菊文	外面5Y5/1灰色。胎土密、φ1mm以下の長石を含む	瓦当裏面周縁部ナデ	表土掘削
63	棟丸瓦	菊文	外面N7/0灰白色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英を含む	瓦当裏面下縁部ナデ	攪乱
64	棟丸瓦	菊文	外面N5/0灰色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英を含む	瓦当表面ハナレズナ付着、裏面周縁部ナデ	遺構検出
65	棟丸瓦	菊文	外面N6/0灰色、胎土密、φ1mm以下の長石を含む	瓦当裏面ヨコナデ	攪乱
66	棟丸瓦	菊文	外面N3/0暗灰色～4/0灰色、胎土密、φ2mm以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当裏面周縁部ナデ	石垣抜き取り時埋土
67	平瓦		外面N3/0暗灰色～6/0灰色、胎土密、φ3mm以下の長石・石英・チャート含む	平瓦凹部に刻印、端部がケズリにより面取り	石垣抜き取り時埋土
68	鬼瓦		外面N4/0灰色、断面N8/0灰白色、胎土密、φ5mm以下の長石・石英を含む	外縁、裏面ヨコナデ	石垣抜き取り時埋土

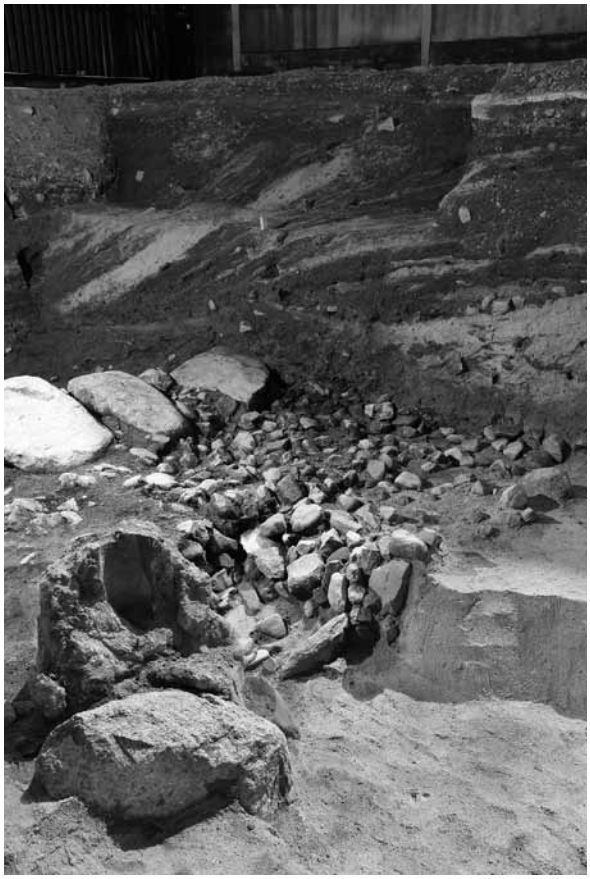
図　　版

1　調査区全景（北西から）

2　石垣１（南東から）

図版２　遺構

１　調査区南半部（北東から）



２　石垣１裏込め（北西から）

２　石列２（北東から）

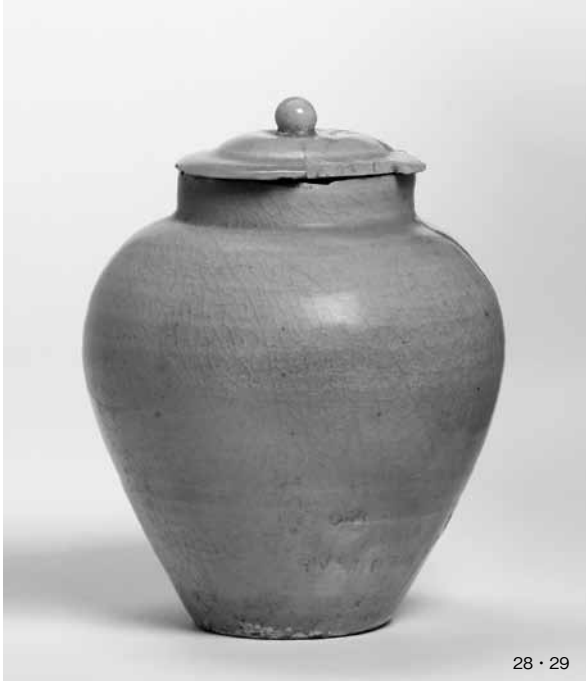
15

2

17

4

27


28・29

26

出土土器

52

42

51

66

63

64

55

67

57

58

出土瓦

報　告　書　抄　録

ふりがな	ながおかきょうあと・よどじょうあと
書名	長岡京跡・淀城跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１７－１４
編著者名	松永修平
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2018年７月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡（ながおかきょうあと） 淀城跡（よどじょうあと）	京都市伏見区（きょうとしふしみく） 淀本町225番地（よどほんまち）	26100	3 1191	34度54分22秒	135度43分05秒	2018年２月５日～2018年３月16日	300㎡	建物建替工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 淀城跡	都城跡 平城跡	長岡京期		須恵器	淀城二ノ丸の東堀とその石垣を検出した。また築城時の造成方法も明らかになった。
		室町時代		土師器、施釉陶器、青磁、瓦類、石製品	
		江戸時代	石垣、内堀、石列	土師器、瓦質土器、施釉陶器、染付、焼締陶器、青磁、瓦類、土製品、金属製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2017-14

長岡京跡・淀城跡

発行日　2018年7月31日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　℡ 075-256-0961